

農産FAX情報 第6号

令和6年8月1日

発行：ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

ドリフト防止対策

ドリフトによる損害（残留農薬、除草剤被害）を避けるため、以下にご注意願います。

具体的な対策例

- ・風の強い日は防除をひかえ、風向き等を確認してから散布する。
- ・除草剤を散布する場合は「飛散防止カバー」や「飛散低減ノズル」を使用する。
- ・できる限り作物と噴霧口の距離を離さずに散布する。

1 秋まき小麦

(1) 麦稈のすき込み、緑肥栽培

- 麦稈は分解が遅いため、ストローチョッパー等で細断し、すき込みましょう。
- 麦稈すき込みに伴う窒素飢餓回避のため、窒素施肥を行う必要があります。ただし、麦稈の分解に利用される窒素肥料は一部であり、麦稈の分解に利用されず流亡することが想定されるため、緑肥の栽培を検討しましょう。

表1 緑肥作物の栽培例

	は種量 (kg/10a)	施肥量(kg/10a)			備考
		N	P	K	
えん麦	15～20	4～6	5～10	0～5	ばれいしょそうか病を低減するが、キタネグサレセンチュウの密度を高める。
えん麦野生種	10～20	5	5	0～5	ばれいしょそうか病を低減 キタネグサレセンチュウを抑制 小豆落葉病の菌量低減効果有り

2 ばれいしょ

(1) 疫病防除

- 疫病菌による塊茎腐敗は、茎葉の疫病菌が土壌中に侵入し、塊茎に感染して発病します。茎葉に効果があっても、塊茎腐敗には効果がない薬剤があるため、薬剤の選択に注意してください。

(2) 軟腐病防除

- 発生ほ場が散見されます。今後も高温多湿な条件が続く場合は注意が必要です。引き続き防除を実施してください。

3 てんさい

(1) ヨトウガ防除

○8月上旬からは第2世代の幼虫発生に注意が必要です。第2世代の幼虫は、8月上旬から10月下旬まで加害します。複数回の防除を行う場合は、同一系統薬剤の使用は避けてください。

○薬剤の効果は、幼虫の齢が進むにつれて低下するため、若齢幼虫のうちに防除を行う必要があります。

(2) 褐斑病防除

○引き続き、予防防除に努めましょう。高温多湿時には薬剤の散布間隔を10日以下に短縮することを検討してください。

4 豆類

(1) 菌核病・灰色かび病防除

○多くのほ場で開花期を迎えています。菌核病は開花期以降の多湿、灰色かび病は、低温多湿で発生が多くなるため、気象経過に注意しましょう。豆類の防除は、10日毎に3回防除を行いましょう。

○灰色かび病はチオファネートメチル水和剤、フルアジナム剤、ジカルボキシイミド系剤に対する耐性菌が確認されています。

熱中症に注意！こまめな休憩・水分補給！

機械の点検や調整は、必ずエンジンを停止！